

暴かれた真実。業界黙示録

「暴かれた真実・業界黙示録」は、実際に起こったパチンコ・スロット業界の事件・詐欺・摘発などをもとに構成された実録風ドキュメント連載である。登場人物や店名は仮名化されているが、事件の内容は極力事実に基づき構成されている。閉ざされたホールの奥で何が起こっていたのか――いま、その真実が暴かれる。

File.07 ガラスの境界――トラック突入事件の記録と、揺らいだ理性の輪郭

佐賀県佐賀市郊外。田畑の間を抜ける国道沿いに「プレイランドフェアリー」は立っている。白い外壁と赤いネオンが目印の、地域では中堅規模のパチンコホールだ。開店から十五年、郊外の夜を照らし続けたその看板は、地元の人々にとって見慣れた風景の一部だった。

平日は静かだが、金曜の夜ともなれば、サラリーマンや常連客で駐車場は埋まる。週末は朝から並びができ、昼過ぎには二百台近い車が停まることもある。裏手には弁当屋と中古車店、向かいにはコンビニがある。ネオンが夜のアスファルトを赤く染める――そんな、どこにもある郊外の光景の中で、事件は起こった。

――十二月二十日、午前三時過ぎ。

店内の照明はすでに落とされ、警備システムが作動していた。フロアでは清掃員が一人、モップを押している。冬の夜

気がガラス越しに冷たく、外は静まり返っていた。遠くでエンジンの音が聞こえたが、彼女は気にも留めなかったという。配送業者か、夜間巡回のトラックだろうと考えたからだ。

だが、その音は次第に近づき、やがて轟音に変わった。次の瞬間、入口の自動ドアが粉碎された。ガラスが爆ぜ、アルミフレームがねじれ、蛍光灯が破裂音を立てて落ちた。トラックがそのまま建物内に突入し、玉箱が積まれたワゴンなぎ倒す。清掃員はとさに事務室の陰に身を隠し、耳を覆った。

数秒後、エンジン音が再び唸り、トラックはバックで脱出していった。現場には警報音と火花の匂いだけが残された。

店長の高島が現場に駆けつけたのは、警備会社からの通報から十五分後のことだった。

の対象に集中したとみられる」と記されている。

事件直後、業界内では緊張が走った。「うちの店にも似たトラブルがあった」「どこで起きても不思議じゃない」――掲示板や業界紙には、信頼の線引きについての議論が相次いだ。出禁は店舗を守るための手段だが、同時に客との断絶の間でもある。ホールと客、その境界を越えるのはいつも人間の感情だった。

警察の検証が終わると、スタッフたちは散乱したパチンコ玉を回収した。床一面に転がる玉の音が、いつもと違う静けさの中で響いたという。その後は業者が入り、割れたガラスや歪んだアルミ枠の撤去が始まった。修復作業は昼夜を問わず続き、看板の再設置が終わる頃には、一週間が過ぎていた。

作業の合間、清掃員の女性がぼつりと漏らした。「あの人、毎日来てたんです」それ以上、彼女は何も言わなかった。

営業再開の知らせを聞いた常連客の中には、「あんな事件があると怖くて打てない」と言う者もいたが、一方で「だからこそ応援したい」と言って開店初日に並んだ客もいた。

高島店長は事件後、スタッフ全員に話をしたという。「出禁というのは、追い出

「正面がまるで爆発したみたいだった。ガラスの破片が道路まで飛び散っていた、あの光景を、いまでも頭から消せない。」

出入口は原形を留めず、玄関ホールの壁面は深くえぐられていた。景品カウンター付近の天井が落ち、床にはパチンコ玉が散乱している。被害総額は約一千万円に上り、営業は即日停止となった。

警察は夜明けとともに現場検証を開始した。残されたタイヤ痕から、犯行に使われたのは中型の二トントラックだと判明。トラックは市内の建設資材会社の敷地から盗まれたもので、施錠が壊されていた。防犯カメラの映像には、黒いニット帽とマスク姿の男が車に乗り込む姿が記録されていた。

捜査員の一人は後に「動きに迷いがなく、目的が最初から決まっていた。偶発

すためじゃない。守るためなんです。お客様を、そして働く自分たちを。」それでも、あの決断が正しかったのかどうか、今も自問していると語る。「人と人との関係って、紙一枚のように薄い。破れたあとに残るのは、疑念と後悔だけです。」

事件後、地元新聞は一面で「パチンコ店にトラック突入」と報じ、地域社会の中でも議論を呼んだ。「遊技依存」「孤立」「社会的支援の不足」――識者のコメントには、事件の再発を防ぐには地域の理解が必要という言葉が並んだ。

しかし、ホール関係者の一人は取材にこう答えている。「私たちはずっと地域と一緒にやってきた。けれど、信頼が壊れると、その積み重ねも一瞬で崩れるんです。」

フェアリーは再開にあたり、新しい強化ガラスと金属製シャッターを導入した。警備会社との契約も見直し、夜間巡回を倍増。従業員には防犯訓練を実施した。それでも高島は言う。「設備を変えても、人の心までは変えられない。怒りも寂しさも、ガラスの向こうに置き去りになったままだ。」

事件から一か月後、修復が完了し、店舗は営業を再開した。新しい看板が取り付けられ、破壊された痕跡は跡形もな

的な犯行ではない」と語っている。

事件発生から二日後、近隣のガソリンスタンド店員が「不審なトラックが深夜に給油に来た」と証言したことで、捜査は一気に進展した。その後、市内の廃工場跡地でトラックが発見され、運転席にはパチンコ雑誌と吸い殻の山が残されていた。

防犯映像と一致した人物は三十代前半の無職の男で、彼は以前フェアリーに通っていた常連客だった。

男は逮捕時、抵抗せず「やっと終わった」と呟いたという。警察での取り調べに対し、男は淡々と「出禁にされたのが悔しかった。あの店は俺を見下した。」語った。

出禁の理由は数か月前の店内トラブルだ。負けが続いたある日、彼は遊技台を叩き、店員に詰め寄った。警察沙汰に

い。開店の日の朝、店員たちはいつもの制服に袖を通した。高島は朝礼で短く言った。「信頼は、作るのも壊すのも人です。忘れずにいきましよう。」拍手はなかった。ただ皆が静かにうなずいた。

午前十時、シャッターが上がり、ネオンが点灯する。開店の音楽が流れ、最初の客が入ってくる。その瞬間、高島は無意識に入口のガラスを見つめた。新しいガラスには、周囲の空とネオンが映っていた。だがそこに、彼の表情は映らなかった。

男は後に懲役四年の実刑判決を受けた。法廷で読み上げられた判決文には、「犯行は身勝手な短絡的」と記された。だが記者のノートには、もう少し異なる言葉が残されていた。――信頼を失ったとき、人は理性の輪郭をなくす。

夜のフェアリーに再び灯りがともる。風に揺れる旗が静かに鳴る。その光景は一見、何事もなかったかのようだ。しかし、高島の耳にはあの夜の轟音がまだ残っている。「ガラスは直せても、心のひびは残るものです。」

遊技という小さな世界の中で、人と人との向き合う。その間にあるのは、目に見えない一枚のガラス。透明で、脆く、そして壊れやすい。この事件は、それを守ることの難しさを、静かに教えている。